

同志社大学

2009年度 個人研究費研究経過・成果報告書

年 月 日提出

所 属	職 名	氏 名
総合政策科学 研究科	准教授	山口 洋典
研 究 題 目	地域コミュニケーションデザインの充実に関するアクション・リサーチ	
研 究 成 果 の 概 要	<p>本研究では、特に人々の流動性が高い都市部において、対人コミュニケーションのあるべき姿を総合的に検討する実践的研究として展開した。特に、人々が異質性と出会うことがコミュニケーションの深化をもたらす契機になるのではないかと考え、都心に散在する多様な地域資源がもつ固有性に着目した。すなわち、場所の固有性が人々のコミュニケーションの有り様を変容させるのではないかという考えから、NPO等の活動拠点における各種イベントで生じるコミュニケーションに対して、ナラティブ・アプローチに基づき、その意味に接近した。</p> <p>具体的には、2007年度より継続して取り組んでいる、大阪・上町台地境界をフィールドとした、ネットワーク型のまちづくりに積極的に取り組んだ。その他、同志社大学リエゾンオフィスならびにNPO法人同志社産官学連携支援ネットワークを通じた京都府の京丹波町での食による地域ブランド化のプロジェクトのリーダーとして、多様な人々の交流機会の創出と促進にあたった。さらには、2006年度より断続的に取り組んでいる、京都府国際課によるインドネシア・ジョグジャカルタ特別区とのジャワ島地震復興支援事業からの発展的展開の具体像の検討にあたった。</p> <p>これらの取り組みから、局所的に発生するコミュニケーションの状況を精緻に分析することで、よりよい関係づくりのための意思決定を促進するツール、モデルを明らかにした。その内容は、第11回国際ボランティア学会大会でのラウンドテーブルディスカッション「21世紀における Voluntary Action と社会」(2010年3月7日:総合地球環境学研究所)、第8回アジア社会心理学会での口頭発表「Collaborative remembering and spirituality rising through an art exhibition」(2009年12月12日:インド・デリー・ハビタットセンター)、などで報告を重ねてきた。</p> <p>なお、最も大きな成果としては、国際ボランティア学会に査読付論文「自分探しの時代に承認欲求を満たす若者のボランティア活動:先駆的活動における社会参加と社会変革の相即を図る「半返し縫い」モデルの提案」(ボランティア学研究(9), 5-54.)が掲載されたことが挙げられる。この中では、自分探しという表現は、時に否定的な言説として用いられるが、ありがたい自分を探していくということは、根源的に否定されるべきものではないことを明らかにした。その上で、先駆的なボランティア活動が展開されていくためには、日常の風景から逃避せず、自己満足に埋没してはならないとする観点から、活動現場と日常生活との関係について「半返し縫い」モデルを提示した。</p> <p>その他にも、4月には分担執筆で創元社より「地域を活かす つながりのデザイン:大阪・上町台地の現場から」が刊行された。こちらでは編集幹事の責も担い、一連の上町台地境界の研究の、一端の総まとめを行えたとも認識している。</p>	